



火打石 ～弥生石器の再利用～

時代：中世～近世

調査名：唐古・鍵遺跡 第64・74次調査

発見年：1997年（第64次）・1999年（第74次）

秋も深まり、朝晩は寒く、夜の長い季節になってきました。そこで、今回の逸品は暖かさと灯りをもたらしてくれる「火」をおこす道具、火打石をとりあげます。

火打石は、火をおこすための手のひら大の石で、^{ぎよくずい}玉髓（メノウ）や石英などの硬質な石材でできており、火打ち金とセットで用いられました。火打ち金は木製の板に^{はがね}鋼をはめ込んだもので、火打石に^{こす}擦るように打ちつけることで鉄部が削れ、火花が出るようになっていきます。江戸時代には庶民にも一般的なものとなり、^{かまど}竈や^{あんどん}火鉢、^{まよ}行燈などに火をつける役目のほか、「切り火」という魔除けの意味を込めた使い方もあったようです。

田原本町で火打石と考えられる石器の存在が明らかになったのは、小阪里中遺跡の調査です。この遺跡の屋敷跡からサヌカイト製打製石器が出土し、弥生時代でなく近世からの出土であること、側辺が打撃によって潰れていることから、近世の所産である火打石と推定されました。

今回展示されている逸品は唐古・鍵遺跡から検出された中世以降の屋敷跡から出土したものです。

近世の人々は周辺の弥生遺跡に散布していた適当なサヌカイトを採集し、火打石として利用していたのかも知れません。

